

平成二十六年三月十七日

「フィリピンに學ぶだと?とんでもない。あんな國のどこに、學ぶところがあるんだ。」なる罵聲、飛び來らむ。されど人に學ぶは、吾人より傑れたる者よりのみなりや。「他山の石」なる言葉あり。「他山の石、以て玉を攻(みが)くべし」とも云ふ。他山に産する粗末なる石にても、以て玉を攻くを得。中國の毛澤東、「反面教師」なる表現を事とせり。中國にては、忘れたる人多かれど、日本にては、なほ記憶せる人尠からず。「他山の石」は、石ならば、よき磨き石もよけれど、「反面教師」は惡しき教師に限る違ひあり。されどフィリピンは、我ら日本人にとり、「他山の石」にして、「反面教師」なるべし。

表面のみを見るに、フィリピンは、日本と似ても似つかぬ國なり。社會の貧富の差、日本の及ぶところに非ず。マニラに行きしことある人は、鐵柵を巡らし、武裝せるガードマンの、門に立てる高級住宅區を知りたるべし。今は改善せられたるらむも、マニラ灣沿ひの塵芥の山のごみ拾ひに、貧しき子らの走り廻れるを、見たる人もあらむ。國民の大多數は、スペインとアメリカの植民地たりし間に、キリスト教化す。南部のイスラム地帯を除き、全國にキリスト教會、信者を集む。上層には、マルコス大統領時代に特權を剥奪せられたるも、その以前は、代々必ずスペインより夫人を迎へ、純粹なるスペイン人の血を、維持せる財閥一族あり。サンミゲル・ビールのソリアノ家、土地財閥のアヤラ家等、是なりき。アメリカの植民統治、フィリピン社會に、日本とも、西ヨーロッパ植民國とも、異なる刻印を刻したり。投資に、公共の觀念無く、私的利益あるのみなれば、本來の「公共」投資は存せず。日本なれば「公共投資」と呼ばれる事業も、私企業に必要な場合に限り、建設せらる。鐵道も道路も、營利活動に必要な地區に通ずる耳。企業の事業に必要な地に達せば、突然に中斷す。さながら未完の樂曲を聽くが如し。これもマルコス大統領時代以前なるも、我、マニラの東、去ること三十キロ程度の村を、訪ひしことあり。舗裝道路は途中に切れ、粗末なる土の道を辿る。村には、掘つ建て小屋の如き家屋立並び、色黒き裸足の住民ら、蟻の群がる如く群がれり。首都マニラは、經濟活動の中心なれば、村の住民も、首都圏に働く。されどマルコス以前、斯かる原住民居住區に、政治家の關心及ばず。マルコスは、有産者出身に非ざれば、國と有産階層以外の國民にも關心あり。渠以後、フィリピンはかなりの變貌を遂ぐ。アメリカの、マルコスに敵意を有したる所以ならむ。

斯かるフィリピンを見るに、日本との共通點皆無なりと見ゆ。されどこの國の社會と政治を、更に具さに見るに、今の日本と、意外なる共通點あり。この國の有力政治家、ほぼ特定家族の出身者に限られ、多くの大統領、過去の大統領又は有力政治家の家系より出づる、現下の日本と異ならず。度外れたる英語志向ありて、自國語の學習を輕視するも、さならずや。但し幸ひにして我ら、フィリピン人ほど英語に堪能ならざれば、多くの人材を、アメリカに引抜かるるを免る。されど我らにも、イチロー、マー君の例あり。アジアの文化に通曉せる社會人類學者、故中根千枝教授、かねがね基層文化の、日本に最も近きは、東南アジア、就中マレー

シアのマレー人より、フィリピンに至る島嶼部なりと言へり。首肯すべき指摘なり。外來文化に毒せられざる庶民の生活と文化を見るに、日本人とフィリピン人に、底抜けの善良さと附和雷同性、共通す。フィリピンの、人は好けれど腑抜けの男と、勤勉にてしつかり者の女の對比、亦當今の若き日本人の多くに見ずや。

フィリピンの國民的英雄に、ホセ・リサルあり。スペイン統治期の最後に、民族運動の故に、マニラにて銃殺せられたる革命家、醫師にして作家なり。スペインに替りて統治國たりしアメリカ、スペイン統治に反抗したる英雄とて、顯彰す。高山右近移住時の日本人、或いは中國人の、血を引くとも傳ふ。天才的語學能力の持ち主にて、フィリピンの言語と、スペイン語、ラテン語、中國語、日本語を能くす。スペイン語にて著作し、民族精神を鼓吹せる小説二篇、今もフィリピン國內に廣く讀まる。その一篇 *Noli me tangere*、スペイン植民地時代のフィリピンを描き、植民地社會の實態を活寫す。題名はラテン語にて、「我にな觸れそ」の意なり。フィリピンを、人の觸るれば、痛みに得堪へざる瀕死の病者に譬ふ。主人公、スペインにて學業を終へ、故郷の町に歸りて、フィリピン人のため、スペイン語を教ふる學校を開設せんと試む。されど植民地社會、特にカトリック勢力の抵抗に遇ひて、挫折す。主人公に、リサル自身の面影、彷彿す。フィリピン人に、スペイン語の教育機會を與ふるは、スペイン人側に抵抗強けれど、イエズス會は例外にして、リサルは、イエズス會の大學にて、スペイン語を習得す。後、スペイン本國に留學し、小説を書けり。リサルの小説中に、その大學に學びたるフィリピン人インテリら、自國の現状に絶望しつつも、學びたるラテン語古典の知識に基づき、古代ローマのキケロに親しみ、セネカを論ず。些かならず、滑稽なり。されど現下の日本人インテリの、ハイデッガーに親しみ、フーコーを論ずるに、何の相違かあらむ。カトリック神父の周圍に、富裕層のフィリピン女性ら蟻集す。渠等、金を惜しまず、スペインより取寄せたる、最高級のドレスを身に纏ふ。神父の子を懷妊せば、教會の體裁上、神父の子なる事實は隠すも、フィリピン人に對しては、それを誇る。一例を擧ぐれば、マルコス大統領の夫人イメルダが實家、レイテ島のロムアルデス家、マニラ大司教の子孫なるを誇る名族なり。斯かる名家より妻を迎へたる、富裕層出身ならざるマルコスの、大統領に就任し得たる理由なるべし。

リサルの小説の登場人物に、嗤ふべく、憐れむべき一フィリピン人女性あり。上流階級出身者に非ざるも、フィリピン人男性は見向きもせず、ひたすらスペイン人男性に憧れ、追ひ求む。漸くにして、スペイン人元軍人の流れ者をつまみ、同棲す。フィリピンの言葉を賤しみて、自らはスペイン語なりと思へど、男も理解し得ざる奇妙なる言語を、日常的に話す。かるがうちに自らの言葉も忘れ、本人は、フィリピンの言葉なりと信ずる言語にて語るも、聽く人、その奇妙なる言葉を理解し得ず、スペイン語なりと思ふ。これによりて本人、今や自分は、スペイン人になれりと満足す。同棲せるスペイン人元軍人、小説主人公の事業破壊に功ありて、スペイン本國に歸國す。されど女は、哀れにも遺棄せられ、男の、我に知らせず、已にフィリピンを出發せるを知らず。

昨秋、巨大なる颱風、フィリピンを襲ひ、レイテ島を直撃す。それを報じたる新聞記事に、レ

イテ州知事ロムアルデスなる名を讀めり。こは、かのロムアルデス家の一員たる、確實なり。恐らくはイメルダ夫人の甥なるべし。我、昔、イメルダ夫人のみならず、渠が兄弟二人と會ひしことあり。一人は駐米大使、今一人は政治家にして、上院議員なりしや、或いは州知事なりしや、定かには記憶せず。されど二人とも、顔を見て、ぞつとするほどの悪相なりき。マルコス大統領時代、日本の援助を要請し來たる事業中、我らマルコス案件とイメルダ案件を、劃然と辨別せり。マルコス案件はほぼすべて、よく考究したる優良案件なるも、イメルダ案件は、大方賄賂と腐敗の絡みたる性悪案件なりき。然れども我、イメルダが二人の兄弟を見て、イメルダは、ロムアルデス兄弟に比ぶれば、遙かにまともなる人間なるを知れり。夫の感化の故ならむ。今のレイテ州知事は、此の二人のロムアルデス兄弟の何れかの子ならむ。さればレイテ州の政治は、腐臭を放ちたるべし。レイテ島の颱風被害、甚大なりしは、颱風の規模の大なりしのみ因るや。我大いに疑ふ。

フィリピンは、大統領も國會議員も、選舉民の選舉に因りて、選出する「民主主義國」なり。近年の表現に従はば、我らと「價值觀を共にする國」と言ふべし。政治と選舉に、特定門閥家の勢力強きこと、アメリカとの關係密接にして、國內の事業に、アメリカ企業の巨利を博するに抵抗無きこと、我らと共通す。されど現在の時點なれば、未だ彼我の懸隔大にして、比較を絶す。然りと雖も日本の政治家ら、代々の世襲續きて、今の眞面目さと視野の廣さを失ふこと無きや。政策の立案、實施、政府官僚の手を離れ、又政府官僚の能力と權限低下して、政治家の決定權増大、政府全般の政策の、質の低下を齎さざるや。傑れたる人材の日本を離れ、歐米に赴くこと、今の日本にても、野球、サッカー、藝術の分野、或いは國際的企業の幹部に起くるも、そが他の分野に廣まり、フィリピンの如く、人材の他國に去ること、常態化せざるや。現在の日本に、歌と踊りへの志向、顯著なり。フィリピンの如く、日本人の多くの若者、音樂と踊りに熱中し、アメリカに行き、歌と踊りにて、金を稼がんと思ふに至らざるや。そは未だ遠き將來の慮りに過ぎず。されど我ら日本人の、日本人たるの誇りを忘れ、國語を輕視し、英語の會話力のみを習得せんと焦り、徒らに歐米文化に憧れて、アメリカ式「民主主義」のみを、政治の理想なりと思ひ込み、既存の廉潔、且つ效率的なる制度を閑卻せば、日本の未來の姿の、フィリピンの如き國に近附く可能性を、否定し得ざるべし。フィリピン、豈我らが「他山の石」ならざるや。